

【第1分科会】

<テーマ>

小・中学校における支援体制作り - 特別支援教育コーディネーターを中心に -

<趣旨>

小・中学校の特別支援教育コーディネーターは、校内支援体制の整備や保護者・関係機関等との連携の窓口、校内外の連絡調整の役割を担うものとされ、各小・中学校の障害のある子どものニーズに応じた教育を推進する上での必要な機能の一つとして位置付けられている。

本分科会では、小・中学校の特別支援教育コーディネーターとして実践されている先生方から校内支援体制作りに関わる実践の状況や課題、また、特別支援教育コーディネーターとしての役割や機能等について話題の提供をいただく。

宮崎県日南市立飫肥小学校教諭藤井里織氏からは、特別支援教育主任（特殊学級・通級指導担当をまとめる役割）として、校内支援体制の整備に向けて取り組んだ実践をお話いただく。山口県光市立浅江小学校教諭平田雅美氏からは、通常の学級担任が担う特別支援教育コーディネーターとしての役割の実際についてお話しいただく。東京都東大和市立第二中学校教諭渡辺圭太郎氏からは、通級指導担当者として、対象となる生徒の教育的ニーズを整理し教育的支援へ結びつける特別支援教育コーディネーターや校内支援委員会の役割についてお話しいただく。

これらの話題提供を受けて、大阪府教育センター指導主事小田浩伸氏には、研修を行う立場からコーディネーターの役割及び資質の在り方についてのお考えをお話いただく。東京学芸大学教育学部助教授加瀬進氏からは先進各国及び福祉領域でのコーディネーターの役割について情報提供をいただき、また、教員養成の立場から特別支援教育コーディネーターの役割や資質、その養成研修の在り方について考え方をお話しいただく。

さらに、参加者からの質疑を加え、議論の柱を設定し、校内支援体制の在り方や特別支援教育コーディネーターの役割について協議を深めていきたいと考えている。

<日程>

時間	内容
10:00 - 10:20	開会及び担当者・講師の紹介 分科会の趣旨・テーマ・課題について
10:20 - 12:00	話題提供
	(1)小学校 宮崎県日南市立飫肥小学校 藤井里織 氏
	(2)小学校 山口県光市立浅江小学校 平田雅美 氏
	(3)中学校 東京都東大和市立第二中学校 渡辺圭太郎氏
12:00 - 13:00	昼食
13:00 - 14:00	指定討論
	(1) 大阪府教育センター 小田浩伸 氏
	(2) 東京学芸大学 加瀬進 氏
14:00 - 14:50	話題の内容の整理及び質問への回答と協議
14:50 - 15:05	休憩
15:05 - 15:55	協議
15:55 - 16:00	まとめ及び閉会

第1分科会報告(2004.2.10)

小・中学校における支援体制づくり 特別支援教育コーディネーターを中心に

概要

松村からの本分科会の趣旨説明の後、藤井、平田、渡辺各氏から話題提供が行われ、それを受けて小田、加瀬両氏が指定討論を行った。その後、司会者が各氏からの報告や質問に加え、フロアからの質問等も交えて各話題提供者、指定討論者に対して質問を投げかけ、それに対して各氏がコメントすることで全体が進められた。

指定討論

小田、加瀬両氏から次のような提言と各話題提供者への質問がなされた。小田氏は、大阪府での特別支援教育コーディネーター養成研修に関して、小・中学校の教員や市町村指導主事に対して行った研修ニーズ調査結果等も交えながら、今年度の研修、研修のニーズ把握、そしてそれらを踏まえた来年度の研修計画についてそれぞれ紹介した。その後、藤井、平田、渡辺各氏の立場に基づいた質問をそれぞれ投げかけた。

一方、加瀬氏は、コーディネーターとして先行する諸外国や福祉分野での取り組みについて紹介し、それらを踏まえた今後の特別支援教育コーディネーターの在り方について提言を行った。特に福祉分野のコーディネーターについては、これまでの経緯や取り扱われてきた諸問題等について詳しく紹介し、それらを踏まえた上で、話題提供者全員に対して、これまでの経過の中で見られた教師自身の成長についての質問を投げかけた。

司会者からの質問とそれに対する回答

司会者が各指定討論者からの質問とフロアからの質問紙の内容を整理して各話題提供者へ質問をし、それに対して各氏から回答がなされた。

藤井氏への質問は、特別支援教育主任という担任を持たない立場の根拠、現在の立場のメリット及びデメリット、今回報告されていない、行動上の課題のある児童への対応、教師自身の成長、についてだった。それに対し、宮崎県では特殊学級、通級指導教室が校内に3クラス以上ある場合には1名の加配教員がつき、学校長裁量で業務内容が決定できること、メリットとしては児童への直接的或いは間接的な支援や各職員との調整がしやすいこと、デメリットとしては、担任を持たないために、就学前児の早期教育相談、市の就学委員会専門調査委員等の多くの業務を担当することになり、実際的な支援をする時間が少なくなってしまうこと、行動上の課題に関するアンケート調査も既に校内で実施し、その結果に基づいた取り組みを始めていること、子どもを「困った子」ではなく、「困っている子」として捉えるようになったこと、学級担任一人ではなく学校全体で取り組むという意識の変化が見られたこと、といった回答がなされた。

平田氏への質問は、通常学級担任としての工夫と課題、現在利用している巡回指導の仕組み、

実態把握を中心とした研修の実際、教師自身の成長、についてだった。それに対し、空き時間を利用して他のクラスの参観や放課後の情報交換をしているが、空き時間をもう少し増やしたほうが活動しやすいこと、平成13,14年度の「学習障害児(LD)に対する指導体制の充実事業」でつながりのできた臨床心理士を活用する形をとっていること、地域の教師らで開くLD等に関する学習会を通して研修していること、藤井氏が指摘した2点に賛同した上で、教師の児童に対する見方が変わってきていること、といった回答がなされた。

渡辺氏への質問は、生徒指導の問題との関連、障害理解、自己理解の問題、教師自身の成長、についてだった。それに対し、生徒指導部やスクールカウンセラー等と連携をとりながら、学年全体の子どものための指導として捉えるようにしていること、自分の中学校生活をどう捉えるか、プラス面にどう注目させるか、という点を促すようにしていること、生徒への理解が深まってきたこと、通級対象以外の生徒へも教員の理解が広がってきていること、といった回答がなされた。

フロアとのやりとりの中から

コーディネーターに求められる資質や研修に関連して、各氏から次のような発言があった。藤井氏からは、適切な児童理解に加え、今後はそのことに基づいて対応していく力、うまく伝えていく力、法規の理解等の必要性が指摘された。平田氏からは、学級担任が話しかけたり、一緒に考えようと思える人柄の大切さが指摘された。渡辺氏からは、自己理解については知的障害養護学校高等部での実践経験が役に立っていることと、周りの人とうまくつきあっていく力が必要であることが指摘された。小田氏からは、チームアプローチという視点から、人間関係を調整し、校内組織をうまく運営していく力等の必要性が指摘された。加瀬氏からは、教員養成大学として今後研修の予定があること、分かりやすい、具体的な実践力を養成していくことの必要性が指摘された。

まとめ

各指定討論者から次のようなまとめがなされた。小田氏からは、コーディネーターの役割と資質として、実態把握、校内委員会の運営、指導計画作成、校内研修の企画・運営、保護者・専門機関との連携、をそれぞれ行う力の必要性が述べられた。加瀬氏からは、これまでの福祉分野との交流を踏まえ、コーディネーションを評価するシステム、コーディネーターのポジションの確立、「4ない主義」の心構え-「抱え込まない」「ケンカしない」「一人勝ちしない」「押しつけない」、可能な限りの多くの職種とのやりとり、等の必要性が述べられた。

(記録 大杉成喜・徳永亜希雄)